ヘーゲル論理学における〈否定〉の原理

竹村喜一郎

はじめに

一般にヘーゲルは先行の思想家によって思惟された事柄の力と範囲の中へ潜入することによって初めて自己の哲学を確立しえた、と評されている。たしかにヘーゲル自身自己の哲学を以て哲学そのものが完結したかのような口吻を用いつつ、時代からいって最後の哲学を先行するあらゆる哲学の成果を含む「最も発展した、最も豊富な、最も具体的な哲学」(E§13 W8.58)としていることから、彼の哲学の学史的意義を学的伝統との連続性においてのみ査定することも可能であろう。しかしヘーゲルが先行哲学との関りの中で自己の哲学的課題を覚識・定立した事実そのものは否み難いにせよ、このことを以て彼の哲学総体、就中論理学を先行哲学のパッチワークとし、学的伝統の中に解消せしめることは留保されなければならない。なぜならヘーゲルは論理学を、先行哲学において指定された「内容豊かな真理を欠如した、形式的な学問」(GW11.19)としての位置に留めるのではなく、それを「世界の知的解釈の純粋な形態」(GW11.21)「あらゆる学問にすべての生命を賦活する霊魂」(E§24 Z2 W8.85)と位置付け直した上で、周知の如く斯学がアリストテレス以来いかなる後退も前進もみなかったことを賛えたカントに対してその全面的な改作の必要を強調し(vgl. GW11.22)、自ら伝統に背反する形でこの課題を『論理の科学』(Wissenschaft der Logik, 1812-1816)として遂行したからである。而るに私見ではこのような成立事情を有するヘーゲルの論理学に関して、その逐語的解説あるいは外在的批判はともかくとして、伝統的論理学との非連続性はそれ自身として闡明されず、ひいては論理学としての準位を測定する作業もまた放置同然の状態に置かれてきた。この意味において本論はヘーゲル論理学の学史的意義を確定することを見据えつつ、その前梯としてヘーゲル論理学の特質、す

なわち伝統的論理学との非連続相の一端を対自化することを課題とするものである。

ところでヘーゲル論理学の特質を対自化するための視軸を本論においては真理概念と〈否定〉の原理との相関に設定する。ヘーゲルにおいても真理問題が哲学の中心問題であり、同時に哲学において〈否定〉の有する格別な意義を彼がスピノザの「あらゆる規定は否定である」(Omnis determinatio est negatio) という命題に対する評価との連関において次のように言っているからである。「こうして否定 Negation は真実に実在的なものであり、かつ即自存在である。この否定態 Negativität こそが他在を揚棄する運動として自己へと還帰する単一なものをなすのであり、あらゆる哲学的理念と思弁的思惟一般との抽象的基礎である」(GW11. 77)。ここに言われる否定あるいは否定態は、スピノザ的な非存在あるいは欠如としての否定ではなく、その否定すなわち「否定の否定」「絶対的否定」(ebd.) である。従って本論は否定を哲学的理念と思弁的思惟、ひいては真理の「基礎」とするヘーゲルの了解に着目しつつヘーゲル論理学の特質を追尋することを直接の課題とすることになる。(1)

一　哲学的課題意識と方法としての否定

ヘーゲル論理学の特質を対自化するためには、予め彼の哲学の基底的了解を獲得しておくことが不可欠である。それ故ここではとりあえず(1)哲学的課題意識(2)論理学の方位(3)方法としての否定について検討を加え、ヘーゲル論理学の境域を画定しておきたい。

ヘーゲルの論理学を直接問題とする前に、まず第一にヘーゲルをして論理学の改作・改造に立ち向かわせた彼の哲学的課題意識、すなわち哲学とは如何なる営みであり、また先行哲学の問題性―不十分性は如何なる点に看取されるかという覚識を把え返しておこう。直截的に言ってヘーゲルは哲学的営為そのものの規定を先行哲学と共有するにせよ、その真理概念が示している如く先行哲学の共通の前提の排却を介して自己固有の哲学的境位を拓くに至っている。

ヘーゲルが学としての哲学に「対象を思惟によって考察すること」(E§2 W8. 41) という規定を与え、またその目標を「真理の学的認識」(E Vorrede zur zweiten Ausgabe W8. 14) とするかぎり、彼が哲学に課した使命は学的伝統の圏内を超脱するものではない。だが看過しえないのは真理概念の内容の把え返しを介して旧来の哲学の共通の前提を超克せんとするヘーゲルの志向性が顕現することである。すなわち彼は

伝統的真理概念に自己の真理概念を対置して次のように言う。「普通我々は、対象と表象との一致を真理と呼んでいる。この場合我々は、一つの対象を前提し、そして我々の表象はこの対象に適応しなければならないのである。しかし、これに対して哲学的意味では真理とは、抽象的に言えばある内容のそれ自身との一致 Übereinstimmung eines Inhalts mit sich selbst を意味する。したがってこれは先に述べたのとはまったくちがった意味の真理である」(E§24 Z2 W8.86—傍点引用者)。一読して明らかなようにヘーゲルは伝統的な真理概念〈veritas est adaequatio rei et intellectus〉を「対象と表象との一致」と定式化し、それと区別されたものとしての自己の真理概念を「内容のそれ自身との一致」あるいは「事物の本性あるいは概念と事物の存在(実在)〔との一致〕」(ebd.)と規定しているのである。ここにとりあえず哲学の使命の形式的規定の共通性にもかかわらず、真理規定というその実質的内容においてヘーゲルが先行哲学との対質を図っていることが確認されうる。

ところでヘーゲル自身の真理概念の内実の解明は行論の途次試みることにして、ここで配視すべきは、ヘーゲルの伝統的真理概念との対質の事由、すなわち抑々彼が先行哲学の共通の問題性をいかなる場面において看取しているかということである。ヘーゲルが把えた旧来の哲学の問題性は所謂『ハイデルベルク・エンチクロペディー』の第三五節に如実に挙示されている。そこで彼は学の立場に立つためには旧来の哲学が有していた諸前提を放棄すべきことを説く。すなわちそれらは「(1)局限された、対立的に措定された悟性の諸規定が固定的に妥当するという前提、(2)所与の、先行的に表象されている既成の基体 Substrat があって、これが右に言う思想諸規定(悟性諸規定)が自己に適合しているかどうかを判断する基準をなすという前提、(3)認識とは、そういう既成の固定的な述語を何らかの所与の基体にただ関係づけることであるという前提、(4)認識する主観とこれとは結合されるべからざる客観とが対立しており、(略)これら両者の各々の側面が自立的でそれ自身で固定的且つ真なるものであるべきであるという前提」[2]という諸前提である。つまりヘーゲルをして伝統的真理概念との対質にいたらしめた旧来の哲学の問題性とは、ここに指摘された前提(4)から出発し、前提(2)を仮設した上で前提(3)を哲学の究極的課題とすること、すなわち真理の実現とすることであり、こうした問題性はヘーゲルによっては最終的にはこれらの前提の出発点をなす前提(1)に帰着せしめられている。それ故ヘーゲルが見定めた伝統哲学の究極的問題性は悟性の機能の絶対化に存するといいうる。事実彼は言う。「悟性は規定し、これらの規定を固執する」(G W11.7)。

だが、更にヘーゲル固有の哲学的課題意識を把え返すうえで閑却してならないことは、彼が悟性およびその機能の絶対化を排却する根拠を検定することである。ここで確認すべきことは、ヘーゲルが悟性の意義を一方的に否認するのではないことである。「具体的なものを抽象的な諸

規定に分解して区別の真義をつかむことは、悟性の無限の力として尊重されなければならない」（GW12.41）。つまりヘーゲルは悟性の有する規定あるいは区別の機能を評価しつつも、それによって具体的なものが分解・破壊され、かくして生じた抽象的なものが固定化されるところにその問題性を見定めている。この意味においてヘーゲル固有の哲学的課題意識は、悟性の機能を評価しつつもその一面性・有限性を超克して具体的なものの回復＝再構成としての新たな真理概念を定立・叙述することにあったのである。それではヘーゲルにおいてこのような課題意識と論理学の改作とは如何なる連関を有するのか。次にこの問題をヘーゲル論理学の方位の確定という形で検討することにしよう。

端的に言ってヘーゲルは自己の哲学的課題意識の達成の場を論理学に求め、そこにおいて旧来の哲学の隘路を打開する方向性を打ち出す。すなわち彼は「論理学の課題」をある内容のそれ自身との一致という意味における真理の研究とし、具体的な「論理学の仕事」を「思惟諸規定がどの程度まで真理をとらえうるかを研究すること」（ES24 Z2 W8.86）と規定する。この意味において彼の論理学は「純粋理性の体系」「純粋思想の国」（GW11.21）という体裁をとることになる。

しかしより具体的にヘーゲル論理学の方位を見定めるためには、それが旧来の論理学との対比において具えるにいたった性格転換を確認しておくべきであろう。それはとりあえず三点において指摘しうる。その第一は、論理学がそれ自身「本来の形而上学もしくは純粋な思弁哲学」（GW11.7）として形而上学と一体的なものと構成されることである。より明確にヘーゲルは自己の論理学の性格規定を次のようになしている。「論理学は純粋思惟の学として、あるいは一般に純粋学 die reine Wissenschaft として、主観的なものと客観的なものとの統一をその境地としてもっている」（GW11.30）。つまり論理学は主観的なものと客観的なものとの統一を境地とすることにより、単に主観的なもの、すなわち認識の形式的条件のみを問題にするのではなく、旧来形而上学が主題とした「実在的真理」（GW11.16）を対象とすることになるのである。第二に挙げられる論理学の性格転換は、論理学が実質的内容を有する学問として位置付けられるにいたったことである。通常論理学は思考あるいは思惟の、内容を捨象した諸規則・諸法則を対象とする形式的学問と了解されている。これに対してヘーゲルの論理学は、「思惟あるいはより明確には概念的に把握する思惟 das begreifende Denken」（GW11.15）を対象とするのであり、この思惟が主観的なものと客観的なものとの統一であるかぎり、「固有の内容」（GW11.16）「真なる質料」（GW11.21）を含むものなのである。第三のヘーゲル論理学固有の性格は、それが哲学体系中第一哲学の位置を占めているということである。伝統的にヘーゲル以前には論理学にはオルガノン、すなわち諸学の「予備学」として

の位置が指定されてきたにすぎない。而るにヘーゲルは論理学を「影の国」（GW 11. 29）と規定したにせよ、それをまた「最初の学」（GW 12. 198）にして「究極の学」（ebd.）と位置付ける。つまり彼は論理的諸思想を「あらゆるものの絶対的根拠」とする立場から学の体系総体を次のように規定するのである。「論理学を純粋な思惟規定の体系とみれば、他の哲学的科学、すなわち自然哲学および精神哲学はいわば応用論理学である」（E§24 Z2 W 8. 84 f.）。未だ形式的立言の埒内を脱しえないにせよ、以上の性格転換からしてヘーゲルの論理学改作の志向性の所在を知ることができる。

ところでここに挙示した論理学の方位そのもののうちにヘーゲルの汎論理主義を見咎めうる余地もあろう。しかし、ヘーゲル論理学の方位を充全に解明するためには、より立ち入って彼の外見上の汎論理主義、あるいは論理学の性格転換は旧来の哲学的思惟そのものに対する根底的批判を内包するものであることが、彼の哲学的課題意識との連関において把え返されなければならない。それでは論理学の性格転換はヘーゲルの先行哲学に対する批判としていかなる論点を内包しているのか。それは二点において対自化しうる。その第一は、既にみた『ハイデルベルク・エンチクロペディー』にも表明されていた、近代哲学の基本的枠組たる主観—客観図式への批判およびその再編である。彼は主観—客観図式に対して端的に次のように言う。「そこ〔悟性的論理学〕では思惟は単に主観的で形式的な活動と考えられており、思惟に対峙している客体はなんら主観の影響を受けぬ独立の存在と考えられている。しかしこうした二元論は真理ではない」（E§192 Z W 8. 345）。ヘーゲルはこのように主観性と客観性という二つの規定を固定的に前提することを無思想な仕方として斥ける。その理由は一方に客観を「それだけで完成されたできあがったもの」とし、他方に主観としての思惟を「素材のもとではじめて完全になる、なにか欠陥あるもの」とするかぎり、客観は物自体として思惟の彼岸であり続け、思惟はまた素材を受け止めたところでそれ自身の変容を結果するにすぎないことに求められる（vgl. GW 11. 16）。詳述は割愛しなければならないが、ここで認識論上の模写説および構成説の難点が把え返され、[3] そこから主観—客観図式が排却されていることは、それ自身が定位する、意識内に直接対象は与えられないという前提に対して、ヘーゲルが「意識は自我とその対象との対立を自己のうちに含んでいる」（GW 11. 31）と主張していることから立言しうる。それでは翻ってヘーゲル自身主観と客観との関係をどのように処理するのか。それは次のように言われる。「〔対象の〕真の本性は思惟のうちに現われるが、しかもこの思惟は私の作用でもあることによって、対象の本性は同時に（略）思惟する主観としての私の精神の所産でもある」（E§23 W 8. 80）。ここには意識の各私性という近代哲学の大前提を超克する論点も含

まれているが、それはともかく、結論だけ取り出すならヘーゲルは主観―客観関係を主観と客観との協働・合作的関係性という視点から再措定することによって近代哲学の根本前提の超出を図っているのである。次にヘーゲル論理学の内包する第二の論点は、旧来の事物把握に代えてあらゆる事物を言うなれば対他的な示差的区別性において把握する新たな視座を定立していることである。ここで改めて確認しておくべきことは、ヘーゲルの近代的主観―客観図式の排却は直ちに彼がいうところの「古い形而上学」(GW11.17) への復位あるいは現代の一流派が唱える如き「本質直観」主義の選取を意味するのではないことである。たしかに彼は古い形而上学においては思惟と思惟の諸規定が対象の本質であり、そこでは本質直観を呼号する立場におけると同じく「その内在的諸規定のうちにある思惟と事物の真の本性とが同一の内容」(ebd.) とされたことを評価している。だが彼が古い形而上学も本質直観主義をも是認しないことは、古い形而上学と所謂「直接知」との共通性を(1)思惟と思惟するものの存在との単純な不可分性、(2)神の観念とその存在の不可分性、(3)外的な事物に関する直接的な意識可能性とまとめ、それらすべてを否認していることから知れる (vgl. E§76 W8.165 f.)。要言すれば「媒介知」の忌避にヘーゲルは古い形而上学およびここでいう直接知の欠陥を見出しているのであるが、この文脈において銘記すべきことはヘーゲルにおいて媒介知が高調されるのは次のような事物了解に基づくことである。「あるものは他のものなしにも考えられるというようなものではなく、あるものは即自的にそれ自身の他者 das Andere seiner selbst であり、あるものの限界は他のものにおいて客観的となるのである」(E§92 Z W8.197 f.)。つまりヘーゲルは、対象的規定において思惟は一つの自存的対象をそれ自身としては規定しえないとする立場から媒介知の必然性を説くのである。しかもヘーゲルは単に認識論的規定だけでなく、存在論的規定の場面においてもあらゆる事物の示差的他者の存在の不可欠性を説く。「規定には既に一つのものと他のものとが必要である」(E§86 Z1 W8.184)。彼が一つの自存的な対象を前提する伝統的真理概念を斥けたのは、まさしくあらゆる事物のこうした認識論的＝存在論的把え返しを介してなのである。この意味において既成の準拠枠に妥協的な言い方をしておくなら、ヘーゲルは現代哲学において駆使される〈地〉と〈図〉の構図を逸早く自己の論理学の中に組み込む形で、先行哲学の不充全性の克服を図ったのである。ともかくヘーゲルは彼の哲学的課題意識、とりわけ伝統的真理概念の超克というそれを、ここに対自化した二つの視座に定位することによって達成しようとしたと言える。

さてヘーゲル論理学の境域の暫定的画定の試みの最後として悟性的諸規定に定位する先行哲学およびその真理観の克服という課題を達成する方法として〈否定〉が採られていることを簡単に確認しておこう。ところでヘーゲル論理学が悟性的諸規定の超出を目ざすものであるかぎり、

その課題は言うまでもなく理性によって果たされる。「理性は悟性の諸規定を無へと解消する」(GW11.7)。だがヘーゲルは悟性的諸規定を文字通り無に解消することを以てその超出とするのではなく、相反する悟性的規定を理性の働きとしての反省が「関係づける Beziehen」(GW11.17)ことにより「矛盾」を現出せしめ、よって悟性の制限を超えて高まることとする。このような悟性の諸規定の超出は「偉大な否定的歩み」(ebd)なのであり、この意味においてヘーゲルにとって「否定」が「唯一の真なる方法」(GW11.25)なのである。

だがヘーゲルにおいて「否定」が論理学の方法的原理であることは、それによって「学的前進」が可能であるとされていることから明らかであるとしても、尚その固有相を確認しておく必要がある。すなわちヘーゲルにおける否定は否定一般ではない。このことは、彼が学的前進を獲得するために必要な唯一のこととして次の論理的命題を認識することを挙げていることから明らかである。その論理的命題とは「否定的なものはまた同じく肯定的であるということ、換言すれば自己矛盾しているものは自己を消滅させてゼロに、すなわち抽象的な無になるのではなくて、本質的にそれの特殊な内容の否定になるにすぎないということ、あるいはまたそのような否定は全面的な否定ではなくて、自己を解消する一定の事柄の否定であり、それ故に限定された否定 bestimmte Negation であるということ」(GW11.25)である。つまりヘーゲルが唯一の真なる方法とする否定は「全面的な否定」あるいは懐疑論における「抽象的な否定」(E§81 Z2 W8.176)ではなく、それとは異なる「限定的否定」である。このような否定概念を前提として彼は弁証法を構想し、自己の哲学的課題の達成を図ることを試みた。「否定的なものの中で肯定的なものを把握することの中に思弁的なものが成り立つ」(GW11.27)。この意味においてアドルノの指摘を俟つまでもなく「限定された否定」がヘーゲルの方法的原理なのである。(4)

二　哲学の原理としての否定と存在了解の転換

前節においては悟性的諸規定の超出という哲学的課題意識との連関においてヘーゲルの方法的原理としての否定の内容を瞥見した。しかしそれは尚ヘーゲルの主張をなぞったにすぎない。ここではヘーゲル論理学の特質を見定めるべく更に歩を進めて否定の原理を(1)論理学の根本原理(2)反省理論の基軸(3)関係主義的存在了解の境位として把え返そう。

まず第一にヘーゲルが否定を以て哲学的理念の抽象的基礎としたことは、彼がそれを以て自己の論理学、ひいては哲学一般の原理として先行

哲学の超克を図ったことを意味する。このことはまずヘーゲルが否定に与えた存在論上の原理的位置を確認することによって立言しうる。

さて否定性と実在性、否定と肯定といった相関概念をどのように処理するかは哲学の原理的問題であり、固有名詞を冠される哲学の固有性はその処理の仕方に存する。例えばカントは実在するものの規定をめぐってまず判断において「……で(し)ない」で表示される論理的否定と非存在そのものを意味する「先験的否定」とを区別した上で、実在性を表現する「何かあるも」のとしての先験的肯定に対して先験的否定によっては一切の物の非存在が表象されるだけとし、更に否定の概念を、肯定を前提とする派生的なものにすぎないとする。[5] この意味においてカントは否定を哲学的理念の基礎としない。ヘーゲルもたしかに一旦は肯定と否定を対立的に把握する。「否定に肯定一般が対立させられる限りでは肯定とは実在性にほかならない」(GW 11. 76)。だが彼はとりあえずカントとの対比で言えば否定を派生的なものではなく、肯定あるいは実在性と存在上同格のものとみなす。すなわちヘーゲルによれば抑々「抽象的な直接的な否定」「関係をもたない否定」(L1. 68) としての無は、肯定としての純粋有と同一の規定を持つのであり、更に定在する質としての質が存在的なものとみられるときには「実在性」であり、打ち消し Verneigung を伴うものという面から見られるときには「否定一般」である (vgl. L1. 98)。したがってまたヘーゲルは否定をあるものに対する非存在あるいは欠如とみなすのではない。「否定は一つの定在であって、単に非存在を伴うものと見られた質である」(L1. 98)。ヘーゲルにおいて否定はまさに実在的なものなのである。

ところで改めて想起を求めるまでもなく実在性と否定性あるいは肯定と否定の処理は、伝統的な神の存在証明において中心的位置を占める。カントは先験的理想としての神を否定を含まない「実在性の全体」[6] と規定した。これに対してヘーゲルもまた神をあらゆる実在性の総和とするにせよ、それを単に否定を含まない肯定的なものとするのではなく、同時に「すべての否定の総和」(GW11. 76) とする。神＝絶対者把握の問題そのものはしかるべき箇所において論ずるとして、否定の存在論上の位置という場面においてヘーゲルが旧来の哲学との対質を図っていることは看取しうる。

だが更に確認すべきことは、ヘーゲルが否定を実在性よりも高次の規定とすることにより否定をまさしく彼の哲学的原理としていることである。すなわち彼は言う。「絶対的否定態としての否定は絶対的本質の本質的規定であり、実在性よりも高次の規定である」[7] (ebd.)。ここに言われる絶対的本質は先の実在性の総和に当たるものであり、したがってまた存在論上真なるものと称されるものでもあるが、それはともかくこの

一文を理解するためには今一度ヘーゲルの否定概念そのものが検討されなければならない。さてヘーゲルは否定そのものは「制限」と「当為」という二契機を有するものとする。すなわち第一の契機としての「制限」は「あるものが欠けていることとしての欠如」「反省された、即自存在へと関係づけられた否定」（GW11. 77）である。これはスピノザ的な規定態としての否定である。これに対して第二の契機すなわち「当為」としての否定は「即自存在的な規定態」「他在の否定」（ebd.）であり、このかぎりそれはあるものの非存在あるいは制限としての否定の否定、絶対的否定である。ヘーゲルはこのような二つの否定が「相互に他者であり、相互に限界づけあっている」（ebd.）とするとともに「否定の自己自身への関係 die Beziehung der Negation auf sich selbst」（ebd.）を構成しているとする。ところで否定を実在性よりも高次の規定とする先の一文との連関においてここで留意すべきことは、ヘーゲルが「他在の否定」としての否定を「自己自身への関係 Beziehung auf sich selbst」（ebd.）とし、更に本来の否定態または否定的本性すなわち「絶対的否定態」としていることである。一般的にヘーゲルは既述の否定の二形態のように相互に限界づけあうもの同士を否定的に関係するものと把え、第一のものを直接的なものとするなら、第二のものとしてのこれの他者を第一のものの否定者とする。こうして彼は最初の直接的なものが媒介されると同時に第二のものもまた媒介されたものとして第一のものの規定をその中に含んでいるとする。ヘーゲルによればこうした事態の把握が「理性的認識における最重要点」であり、論理学全体がその「例証」なのである（vgl. GW12. 245）。つまりヘーゲルはスピノザ的否定を悟性の原理とし、その否定すなわち絶対的否定を理性的認識の極致とすることによって、この意味での否定を自己の哲学の原理としているのである。

それでは否定が先行哲学の批判的超克を課題とするヘーゲルの哲学的原理であることの確認を踏まえて、ここで否定の原理がヘーゲル論理学に如何なる特質を賦与しているかという本題に入ることにしよう。

否定を原理とするヘーゲル論理学の特質とは結論的に言えば反省（照）Reflexion 理論、すなわち「〔対立する規定を有する〕両者の真理は、ただ両者の関係の中にのみあり、したがって各々がその概念そのものの中に他の規定を含む」（GW11. 285）という理論に定位していることである。すなわち反省そのものは、ヘーゲルによれば「自己自身の中にとどまるところの生成と移行との運動」（GW11. 149）であるが、それはまた否定の二形態においてみた如くあらゆる事物はその規定性を共軛的対他的反省関係においてはじめて獲得するとする理論である。したがってこの理論からはあらゆるものは、実は前節で悟性主義的妥協的に述べた如き単なる外的な示差的区別性において把握されるのではなく、他者との

相互内包的関係性においてはじめて存立するものと把握されることになる。すなわちヘーゲルは言う。「個体はその定在をそれ自身のうちにもたない」(GW11.76)。それでは個体はどのようにして存立するのか。「各々はそれ自身のもとにおいてそれの反対のものであり、こうしてそれの他者との統一である」(GW11.82)。ここに言われる事態が「自己自身への関係」「絶対的否定態」である。つまりヘーゲルによれば、有限なもの、個別的なものはその規定の他在をそれ自身のもとに持っていることによって、すなわちそれ自身が他在の他在であることによってはじめて存立しうるのである。ところでこの理論が否定の原理を基軸とするものであることは次のような表現からも窺知される。「現存しているものは、その否定によって自己自身と媒介されている独立態である」(GW11.223)。つまりあるものが存立するのは、それと対立するものとの統一に入り込むかぎりにおいてであるが、そうすることによってあるものは揚棄されたもの、すなわちその直接態が除去されながらも保存されているものとなるが、ヘーゲルは、この揚棄されたものを既にみた如く「媒介されたもの」あるいは「ひとつの反省されたもの ein Reflektiertes」(GW11.58)とするのである。いうまでもなく否定を基軸とする媒介あるいは反省は一方的片務的ではなく、相互的双務的である。

しかしながら通常の悟性主義的表象にはなじみ難いこの反省理論の妥当性そのものが問われよう。この理論の原理的基礎づけをヘーゲルは論理学の根本原則としての同一律に即して試みているが、その検討は次節で行なうことにして、とりあえず言えば反省理論そのものは上と下、父と子といった身近な例に即するなら、次のような事態の把え返しを意味する。すなわち上とはまず下でないところのものと規定できる。だが上をこのように上と規定しうるのは下があるかぎりにおいてのみである。そしてまたその逆でもある。あるいは父は子の他者であり、子は父の他者であって、各々は他者の他者あるいは他在の他在としてのみある。ヘーゲルはこのような意味において一方の規定は他方の規定との関係の中にのみあると同時に一方の規定にはその反対が含まれているとする。したがって上は下との関係を離れてはもはや上ではなく、場所一般であるにすぎず、父も子に対する関係を離れて独立したものと見なしうるにせよ、その場合には父ではなく男一般である。このようにヘーゲルは通常自存的な妥当性を有すると私念されるあらゆる事物を対他的反省(照)的に規定し返す。つまりヘーゲルによれば直接的な形態において絶対的に存立していると受け止められているものはことごとく実は他在の否定としての自己自身への関係、すなわち反省したものなのである。

この意味においてヘーゲル論理学の特質は反省理論への定位に求められるのであり、ヘーゲルはこの理論に定位することによってあらゆる事物の自存的妥当性を前提する先行哲学の超出を志向したのである。因みに言えば、たしかにヘーゲル論理学の論理的進展のあり方は、建前とし

ては存在論では他者への「移行」、本質論では固有の他者への「照映」、概念論では「発展」となっているにせよ(vgl. E§161 Z W8. 308)[8]、反省を原理とする本質論は言うに及ばず、存在論は「反省の諸規定と全運動がその内部に属する領域」(GW11. 41, L1. 64)であり、また「いかなる規定も自己反省 Reflexion in sich である」(GW 12. 251) と言われるかぎり、概念論にも反省理論が通底しているのである。

ところで以上のようにヘーゲルがあらゆる事物を対他的反省規定をもつものとしたことは、存在了解という原理的次元で把え返されるならば、彼が事物の自存的妥当性を前提する旧来の実体主義的存在了解に代えて、関係主義的なそれを定立したことを意味するのであり、そこにヘーゲル論理学の特質の今一つの相を見定めることができる。ここで言う関係主義的存在了解とは、「一者—他者」の相互的区別化的統一態としての関係を第一義的とする世界把握のことである[9]。ヘーゲルが関係主義的存在了解に定位していることは、形式的には既述のようにすべての事物の規定を一者—他者の否定的相互媒介に求め、この相互媒介を「関係 Beziehung あるいは相関関係 Verhältnis」(GW12. 245)と名づけていることから明らかである。

しかし存在了解という視角から再確認すべきことは、あらゆる事物を一者—他者の相反的な被媒介＝媒介的関係性において把握するといっても、ヘーゲルが一者なり他者なりの存在論的自存性を前提した上で、それぞれの認識論的規定性のみを対他反照的な区別性において把握しているのではないことである。すなわち彼は言う。「一方は他方との関係のうちにのみ自己の規定を持ち、他方へ反省しているかぎりにおいてのみ自己へ反省しているのであって、他方もまたそうである。各々は他者に固有の他者である」(E§119 W8. 243)。このような関係の第一次性が存在そのものの次元に定位するものであることは、「個体はその定在をそれ自身のうちにもたない」という命題が端的に表明していた。かくしてヘーゲルがあらゆる事物を一者—他者の相互反照的規定関係としたことのうちには、一者—他者という項に先行する関係そのものを第一次的とする存在了解の場面での原理的転換が認定されるのである。しかも更に彼はあらゆる事物を単に固有の他者との単一的関係においてのみ認識論的＝存在論的に規定可能とするのではない。すなわち彼は言う。「規定的な存在、すなわち有限的な存在は、他の存在に関係している存在である。それは他の内容と、したがって全世界と必然的な諸関係の中にある内容である」(GW 11. 46)。つまりヘーゲルは、項に先立つ関係そのものをそれ自体として実体化ないしは要素化するのではなく、それを他の関係との関係性においてのみ存立するものとするのであり、まさにこの意味において彼はあらゆる事物を全世界との被媒介的—媒介的関係態として了解する関係主義に定位していると言いうるのである。翻って前節

において暫定的に確定しておいたヘーゲル論理学の方位の基底をなすものは、まさにこうした関係主義的存在了解にほかならない。

それではこのような存在了解の転換と否定の原理、とりわけ絶対的本質の本質的規定とされる絶対的否定態としての否定とは如何なる連関を有するのか。この点の一応の了解を具体的なものの再構成というヘーゲルの課題意識を見据えつつここで試みておこう。さて既に言及したようにヘーゲルは一面的に悟性を貶下するのではなく、具体的なものを抽象的な諸規定に分解することを悟性の力として評価していた。この評価は具体的なものが全体性であるにせよ、それ自身直観的なものとしては「感性的な全体性」（GW12.41）でしかないという了解に基づく。つまりヘーゲルにとって直観上の具体的なものとは、「世界は一般に形式を欠いた、多様性の全体を意味する」（GW11.352）と言われるかぎりでの世界にすぎない。したがってヘーゲルが悟性に意義を認めるのは、それが多様の無統一としての全体性を限定・分節化する働きを有するからである。この場面で悟性が定立する規定が、「限定一般としての否定」（GW12.34）にほかならない。だが悟性がもろもろの規定に、したがってまた有限的なものに与えるものは「固定性」（GW12.41）であり、諸規定は「不変なもの」（ebd.）とされてしまう。つまり悟性の定立する規定は具体的なものの抽象・破壊である。そこにヘーゲルは絶対的本質すなわち真理の非在を見出す。それ故ヘーゲルは悟性の諸規定の超出を否定の否定として説いたのである。「これらの〔悟性的〕規定の除去も否定である」（GW12.34）。だがそれはあくまでも悟性的諸規定の関係づけ、すなわち「規定の多様性をその統一において把握すること」（GW12.209）としてである。従って否定も方法の場面で暫定的にみた如き外的関係づけではないのである。かくしてヘーゲルは真理を関係の総体として把え返された具体的なものとする立場から「絶対的否定態」を絶対的本質の本質的規定とした、と言うことができる。

三　同一性概念の関係主義的再措定とその意義

ヘーゲルにおける否定原理を介した存在了解の更新は先行哲学が真理規準とした同一性概念の止揚と連動している。ここで言うところの哲学的真理概念に収斂するヘーゲル論理学の特質の更なる対自化のために実体主義的発想の原理的立脚点たる同一性概念がどのようにヘーゲルにおいて処理されているかを(1)本質的同一性概念の定立(2)同一律＝矛盾律の変容(3)同一性了解更新の意義といった諸点に即して検討する。

ヘーゲル固有の同一性概念は周知の如く「同一性と非同一性との同一性」（GW11.37）と定式化されている。[10] これ自身「絶対者の最初の、最

も純粋な定義」(ebd.) とされるにせよ、また「本質的同一性」(GW11. 260) として、旧来の同一性概念に照応する「抽象的同一性」(ebd.) に対置されている。それ故ヘーゲルの真理概念をより具体的に解明するためにもここでまず第一に検討されるべきことは、ヘーゲルが「本質的同一性」という新たな同一性概念を定立するにいたった理由とその概念そのものの内実である。

さて同一性は通常「すべては自己自身と同等である」(A＝A) あるいは消極的には「Aは同時にAと非Aであることはできない」という命題で表現される。今こうした命題を「一般的思惟法則」(GW11. 259) としての同一律あるいは矛盾律として直接とりあげることはしないが、ヘーゲルはこれらの命題で表現される同一性を「抽象的同一性」にすぎないとする。ヘーゲルがこうした同一性把握を斥けるのはこれらの命題に即自的に対応する同一性が実在しないことの洞察に基づく。このことはヘーゲルが通常同一性が定立される仕方そのものを次のように把え返していることから明らかである。すなわち彼は同一性なるものが定立されるのは、具体的なものに見出される多様なものが捨象され、多様なものの一つだけが取り出されることによるとする (vgl. E§115 W8. 236)。したがって彼は抽象的同一性を究極的には「相対的否定作用」(GW 11. 260) の所産、すなわち非同一性つまり区別や差異性を同一性と分離し、更にそれを存在するものとしての同一性の外部に放置する外的反省と抽象の所産とするのである。かくして具体的なものの全体性を真理規準とするヘーゲルの立場からは旧来の同一性概念は不真とされる。

だがヘーゲルは同一性という事態そのものを悖理とするのではない。つまり彼は自己の立場からする同一性の概念を「自己自身に関係する単純な否定性」(GW11. 261) と規定する。この規定が含意するのは、存在するすべてのものは、同等性の中において自己自身に不同等で矛盾するものであり、またその差異または矛盾の中において自己と同一的であるということである。このことをヘーゲルは反省理論に基づき次のように説明する。すなわち同一性が差異性に対置されるかぎり同一性は差異性とは差異するもの、すなわち一つの差異的存在にすぎない。したがって抽象的な同一性は真理の一面的な規定性にすぎず、「真理は同一性と差異性との統一の中でのみ完全なのであり、したがってこの統一の中においてのみ成立する」(GW11. 262f.)。ヘーゲルの説明そのものは抽象的に映じようとも、彼自身言うように経験そのものが抽象的同一性に対する「直接的な反駁」(GW11. 264) を含むものであることは是認されよう。すなわち偶然街頭で出会った人間を旧知の友人と認定する再認的同一視の場合、形姿の差異性の意識を伴いつつ同一性が覚識されることは言うにおよばず、自我の意識的同一性の場合であっても、いわゆるアイデンティティー・クライシスに端的に見られることになる自己分裂を不断に抑止することによってはじめて存立するのであって、異他的要因

が自己内になければ抑々自己同一性の意識そのものが成立しえない。この意味において同一性とはヘーゲルが言う如く「絶対的な否定として、自己自身を直接的に否定するところの否定」（GW11.261）、すなわち「同一性と非同一性との同一性」と言いうるのである。

それでは次にこのようなヘーゲルの同一性把握は原理的次元において伝統的に真理基準とされてきた同一律や矛盾律とは如何なる関係に立つのか。結論的に言ってヘーゲルはまずA＝Aで表現される同一律を空虚な同語反復とし、これを「形式的な真理、すなわち抽象的な、不完全な真理」（GW11.262）のみを含むものとして拒斥するとともに、同時に同一律および矛盾律は普通にそれが考えられている以上のもの、つまり「絶対的区別そのもの」（GW11.265）を含むものと肯定的に解釈する。したがってここではこうした同一律および矛盾律に対する二義的評価を把え返すことを通じてヘーゲルの同一律＝矛盾律に関する基底的了解を闡明しよう。

まず第一に、ヘーゲルが、同一律あるいは矛盾律は区別と対立する抽象的同一性のみを真なるものとして表現すると解せられるかぎり、思惟法則ではなく、「その反対」（ebd.）であるとしたことは、彼が同一律および矛盾律を事実法則ではなく、規範法則と見なしたことを意味する。言うまでもなく形式論理学の根本原則と目される同一律・矛盾律は、その存在性格に関して事実法則か規範法則か争われる。ヘーゲルは、これらの原則、就中同一律が第一次的には「証明不可能 unbeweisbar」（GW11.258）であることを前提されつつ、その絶対的真理性の証明に際しては、何らの基礎づけや証明を必要としないということで満足する「各人の意識の経験」（GW11.263）が引き合いに出され、しかもその手続きとしては実際には経験は一般的な承認を与えるだろうという「信念」（ebd.）に立脚しているにすぎない、と断ずる。ここにヘーゲルが同一律ひいては矛盾律をも思惟上のコンヴェンショナルなルールと認定していると言えよう。

しかしヘーゲルは同一律および矛盾律を単に約束事と断定するだけでなく、それが建前に反して抽象的同一性以上のことを言表していることを抉出することによってそれらを真理規準とする立場が実質的に自己破綻をきたすことを突き出す。つまりヘーゲルによれば「AはAである」あるいは「神は神である」という同一性の言表は、主語に関する規定の具体化を前提しながら同語反復として何も規定を与えないが、そのことによってかえって「無」（GW11.264）を現出させる。つまり「同一性の命題は無を言い表わす」（GW11.286）のであり、そこでヘーゲルは同一性命題のうちに「単純な、抽象的な同一性以上のもの」（GW11.264）が表現されていることを評価するのである。第三者的に見て強弁の感を否み難いにせよ、ここにヘーゲルが同一律を事実法則としないこと、ひいては本質的同一性の概念を定立したことの根拠が見出されるのである。

ところでヘーゲルが同一律を事実法則として認定しないにもかかわらず、通常の理解を超える仕方でそれを評価したのは、そこに彼の存在了解の根本原理たる関係主義、具体的にはあらゆる事物は己れのうちに固有の他者を含むという反省理論の原理的表現を諦観したからにほかならない。このことは彼が同一律と矛盾律の関係を同一律―矛盾律―同一律という命題の運動に仕立てあげ、それを次のようにまとめていることから知れる。すなわちまずヘーゲルは直接的に掲げられる最初の同一律において表現されている無を、同一性が即自的に含んでいる否定性、すなわち「自己自身との絶対的区別」（GW11. 265）と解する。次に彼は矛盾律において単純な自己同等性とともにその否定性が「非A、すなわちAの純粋なる他者」（ebd.）つまり非同一性あるいは区別として展開された形で含まれ、更にまた同一性がこの他者の否定、すなわち否定の否定であることも表現されているとみる。したがってヘーゲルの観点からは矛盾律においては同一性が「ただ一つの関係の中にある区別性あるいは両者〔Aと非A〕それ自身における単純な区別」（ebd.）であることが事態的に表現されており、更に「絶対的な不等性、すなわち矛盾」（ebd.）さえも含まれていることになる。最後にヘーゲルは矛盾律に媒介されたものとして同一律を再度把え返し、そこに「反省の運動、すなわち他在の消滅としての同一性」（ebd.）を見る。このように彼は同一性を表現する命題の意味論的把え返しから、自己同一性のうちに不動の単純者ではなく、「自己自身の解消に向かう自己超越の運動」（GW 11. 264）を析出するのである。この意味においてヘーゲルは形式論理学の原則そのものうちに反省の運動、すなわち関係主義の原理の事態的表現を見出し、その論理的把え返しを以て関係主義の基礎付をおこない、更にそこから自己の真理規準「同一性と非同一性との同一性」を導出しているのである。

以上ヘーゲルの同一性了解およびそれに関連した案件の検討を試みた。ここでこれまでの簡単な総括と後論への足場固めを兼ねてヘーゲルの同一性了解が哲学的問題構制の場面において有する意義を以下の三点において確認しておくことにしよう。

まず第一に挙げうるヘーゲル固有の同一性了解の意義は、それによって悟性的な実体主義的規定の存立機制が把え返されているところに求められる。既述の如く旧来の哲学が真理の規準とした同一律に対する彼の批判は、また彼が定立した関係主義的存在了解の原理的定礎という意義をも有するものであるが、かくして根拠づけられた彼の存在了解の地平からは、通常自存的とされる各々の規定、各々の具体的存在、各々の概念は、すべて「本質上相互に区別された、あるいは区別されうる各契機の統一」（GW11. 289）と把え返される。このがぎり自存的とみなされるあらゆる事物は対立的他者と相互に否定的に関係するところの「否定的統一」（ebd.）なのであって、自存性に終始する悟性的諸規定は、否定

的関係性のうちに存する二つのものを切断し、その各々を自己反省態へと移行せしめる外的反省の所産であることが指摘されることになる。したがって他者を欠いたところに成立すると私念される自己関係は抑々没概念的なのであり、この意味においてヘーゲルは彼の同一性概念を以てヨーロッパ思想史を貫流する個人主義＝アトミズムをトータルに超克する堡塁を固めただけでなく、彼の死後抽象的自己関係性のみを以て真理と主張し、彼を死せる犬たらしめんとした潮流の原理的倒錯性をも予め照明したのである。(11)

第二に指摘しうるヘーゲルの同一性了解の意義は、同一律と矛盾律更には排中律といった原則に内在する中から「すべての事物はそれ自身において矛盾的である」「矛盾はあらゆる運動と生命性の根本である」（GW11. 286）という提題を導出し、これを以てアリストテレス＝トマス的目的論的仕方とも、近代自然科学流の機械論的因果論的仕方とも異なる型の運動了解を定立したことである。つまり体系の枠組を離れて言うなら、ヘーゲルは同一性命題のうちに存する無が更に差異と対立、ひいては「措定された矛盾」（ebd.）に展開することの叙述を通じて、同一性を存在と真理一般の徴表とする旧来の哲学および常識の「根本的偏見」を斥け、これに対して矛盾を内在的規定、更には同一性に比してより深いもの、より本質的なものとして対置し、矛盾を「あらゆる自己運動の原理」（GW11. 287）と規定する。ここにヘーゲル固有の運動了解が定式化されることになる。すなわち彼によればあるものの運動とは、それが今の瞬間にここにあって他の瞬間にはあそこにあるということではなく、同一の今の瞬間においてここに存在するとともにまたここに存在しないこと、また一定のここにおいて同時にあるとともにないことである。したがって運動とは原理的には「定在する矛盾」（ebd.）なのである。ここにアリストテレス流の矛盾律すなわち「同じものが同じ関係において、同時に同じものに属し且つ属さないということはありえない」という定則に定位した、デュナミスからエネルゲイアへという方式の運動了解とも、カント的な運動了解、すなわち「運動は我々の外にある〈何かあるもの〉ではなくて、我々のうちにある単なる現象すぎない」(12)というそれとも異なる運動了解が構築されているのをみることができるのである。

最後に第三に摘記しうるヘーゲルの同一性把握の意義は、その「同一性と非同一性との同一性」という式述、そしてその一つの応用が客観を「それ自身において形式をもった質料 die geformte Materie」（GW12. 134）とする了解、すなわちいわゆる裸のマテリーの拒斥となることからして彼が現代哲学において言われるところの「として als 関係」、すなわち「等値化的統一」の問題構制(13)によって世界の把握＝再構成を試みたことにある。もとよりヘーゲルは明示的に「として」関係を説いてもいなければ、「等値化的統一」なるタームを使用しているわけでもない。

しかし彼が「同一性と非同一性との同一性」という概念を絶対者の原理的定義とし、また論理的諸規定と「絶対者の諸定義すなわち神の形而上学的定義」（E§85 W8.181）との同定可能性を明言しているにせよ、論理的にはその都度展開される論理的諸規定はまさに「限定された否定」＝限定された肯定として、特定の射映における絶対者の様態＝分節化された現相としての世界とみなしうるのであり、また彼が学的展開を認識の進行、すなわち単純な規定から具体的・豊富な規定への進行としながらも、「進行は他者から他者への流出 Fließen と見られてはならない」（GW12.250）として流出論を棄却し、各規定を「自己内反省」あるいは「一つの規定された、他と差異する領域」（GW11.289）としていることからも、あらゆる事物をレアール・イデアールな区別的統一態として把え返しているとみることができるのである。

四　哲学的真理概念の境域と位相

前二節においては否定原理に着目することによってヘーゲル論理学の特質の対自化を図った。最後に懸案の内容のそれ自身との一致という真理概念に一応の解明を与えることを通じて課題の更なる深化を試みたい。ところでヘーゲルの真理概念も伝統的形而上学における神の定在の存在論的証明とは無縁ではない。[14] すなわち彼の真理観はこれまでも触れてきたが、直截には「真なるものは全体である」[15]という周知の定式のうちに表明されており、この定式は「絶対者は理念である」「理念は真理である」（E§213 W8.367 f.）という命題との連関において真理＝全体あるいは総体性＝理念＝絶対者という等式に展開されうるからである。この意味において(1)個と全体の存在性格(2)有限者と絶対者の関係(3)真理の存在様態といった論点について検討することによりヘーゲルの哲学的真理観の圏位を照明してみたい。

ヘーゲルの真理概念を解明するためにまず検討されなければならないのは個とその全体あるいは総体性の存在性格の了解である。なぜなら伝統的形而上学において真理すなわち絶対者とされた実在性の総体性とは、独立した事物、つまり特定の性質を伴った諸実体の総和あるいは集合体であったが、ヘーゲルが個物の自存的妥当性あるいは自己同一性を斥けるかぎり、改めて諸々の個物とそれらの全体との存在性格に関する把握が問題になるからである。しかし結論的に言ってヘーゲルにおける個と全体は伝統的形而上学における実在性とその総体性とはその存在了解を異にする。

まずヘーゲルが伝統的形而上学において言われる総体性の前提としての独立した事物そのものの即自的妥当性を端的に斥けたことは、「個

体は定在をそれ自身のうちにもたない」という命題において表明されていた。しかし、ここでは単に個物の自存的妥当性の否認を再確認するのではなく、更にヘーゲル自身実体そのもの、すなわちスピノザが言う「自存するもの ens per sui」あるいはカント的な「常住不変なもの Beharrliches」または「物自体 Ding an sich」としての実体をどう処理しているか検討しておこう。ところで伝統的に実体は、変化するものの根底にあって自らは不変で自己同一を保ちながら変化する諸属性を担う基体、したがってまた諸性質を記述する諸述語を担う主語と把えられてきた。今このような実体概念に対するヘーゲルの応接をカント的物自体に即してみれば次のようになる。まず認識論的場面における物自体の認識不可能性に関しては、それが他者への反省および一般に異なった諸規定が排除された「一つのきわめて単一な抽象態」(GW11. 64) である以上認識できないのは当然ということになる。それでは物自体はヘーゲルにおいて存在論的にはどのように把え返されるかといえば、彼はいわゆる物の場合にはそれを物の有する諸特性の中に根拠として存在している自己同一性とするが、しかしそれ自身諸特性に規定された「制約された根拠」(GW11. 331) として物の直接的根拠とされるのではない。つまりヘーゲルは物の規定性をその諸特性に求め、更に諸特性を「自立的な物質 Materie」(GW11. 334) に還元し、最終的には物を諸物質の集合、しかも否定的統一態としてのそれ、すなわち「点性 Punktualität」(GW11. 337) に帰着せしめる。また手続きこそ違え、彼は自我そのものあるいは霊魂なるものの存在をも否認する (vgl. GW 11. 332, 339 f.)。こうしてヘーゲルは物自体を否定性とすることによって物あるいは自我の自存性を原理的次元において否定し、伝統的哲学が前提した不変不動の基体としての実体の存在をも排却するのである。

それではヘーゲルにおいて個別的なものの存立はどのように把え返され、またその全体はどのような存在性格を与えられることになるのか。まず個体あるいは個物に関しては次のように言われる。「事物の本性は、事物の区別された諸々の概念規定が本質的な統一の中で結合されるところにある」(GW 12. 95)。つまり個物は諸々の概念規定の「本質的な統一」の中においてのみ存立するのであり、この本質的統一がヘーゲルが言う全体である。それはまた「有機的統一」「生命のある具体的統一」(GW11. 19) とも表現される。それ故このような全体の存在性格について言えば、それは伝統的形而上学が共通の理解としたバラバラなものの単なる寄せ集めではない。したがってまたこのような全体＝総体性のうちにおける個は次のように把え返されることになる。「いかなる内容にせよ、全体のモメントとしてのみ価値を持つのであって、全体を離れては根拠のない前提か、さもなければ主観的な確信にすぎない」(ES14 W8. 60)。ここでとりあえず有機体モデルに妥協した形でヘーゲルの個と

全体との存在性格を把え返しておくなら、それは有機的全体とその分肢という性格を持つということになる。だがこれはあくまでも一つの様相ということで、更にそれ自身有限者と絶対者との関係の検討を介して規定し返されなければならない。

しからば次にヘーゲルは有限者と絶対者の関係をどう把えるのか。彼の真理観との連関でまず問題とされなければならないのは、とりあえず有機体とのアナロジーで把え返しておいた個と全体あるい総体性との関係が有限者と絶対者との関係に置きかえられた場合、存在性格上伝統的実体概念とどのような関わりを持つのかということである。端的に言ってヘーゲルが定立する全体あるいは総体性は絶対者としては有機的実体ともまた異なる存在性格のものである。たしかに彼は言う。「実体は絶対者であり、即且向自的にある現実的なものである」(GW12.12)。だがここに言われる実体＝絶体者が有限者に先立つとされる旧来の実体と異なるものであることは、スピノザのいう「自己原因 causa sui」(GW11.376) あるいはライプニッツのいう「唯一である実体〔モナド〕」(GW11.16)に対する批判に即して立言しうる。ヘーゲルがスピノザあるいはライプニッツ流の絶対者を斥けるのは、彼らのように最初に絶対者を前提するなら学の進展が「流出 Überfluß」(GW12.241)となるからであり、それを回避する方法が「限定的否定」なのである。つまり究極的にヘーゲルが絶対者すなわち真理としたものは「結果」(GW11.376)であって、それは有限者の存在を前提するところの「自己反省の原理あるいは個別化の原理」(GW11.379)を有することによってはじめて出現するものなのである。このことは絶対者そのものが「絶対的な、すなわち自己否定的な否定という意味の否定」(GW11.376)とも表現されていることからも明らかである。したがってヘーゲルの言う絶対者あるいは全体は、実体と名ざされようとも個あるいは有限者に先立つ全体という仕方で押さえられる有機的実体ではなく、また全体と個物の存在性格は伝統的な実体―属性関係の枠組で押さえられるものでもない。

ではより積極的には有限者と絶対者の関係そのものをヘーゲルはどのように把えるのか。ここにおいて明らかになることは、要言すれば彼が有限者と絶対者を絶対的同一的なものと把えていることである。伝統的形而上学では実際には有限者あるいは偶然的なものを前提して、そこから総括者としての絶対者の存在が推理されてきた。こうした事態をヘーゲルは有限者の存在が絶対者の根拠であり、有限者が存在するが故に絶対者が存在する、とまとめる。そしてそこから「有限者の存在が絶対者の存在である」という推論の命題を引き出す。これに対して彼は自己自身の立場を次のように表明する。「真理は、有限者がそれ自身において矛盾的対立であるが故に、すなわち有限者が無いが故に絶対者が存在するということである」(GW11.290)。更にヘーゲルはこうした絶対者了解を推論の命題として「有限者の非存在が絶対者の存在である」(ebd.)と

定立する。ここに明らかなように彼は伝統的形而上学が前提した絶対者と有限者との絶対的区別を斥け、有限者の自己否定態を絶対者とするのである。この意味において彼の言う実体としての絶対者あるいは神は有限者の否定態としての生動的有機的統一態とみなしうるのである。

それでは以上の検討を踏まえて究極的にヘーゲルのいう真理とはどのような存在様態を有し、それ自身真理観としてはどのような固有性を有するものと把え返されるのか。一言で言えばヘーゲルが言う真理とは「絶対的理念 die absolute Idee」としての世界にほかならない。彼は絶対的理念を「一切の真理」(G W12. 236)としながら、それ自身を「その内在的根拠と現実的存立とが概念であるような客観的世界」(G W12. 235)としているからである。ヘーゲルにおいて概念とは、種々の表象を一つにまとめた共通の表象、そして対象に直接関係するのではないもの、という通常のそれではなく、「対象の中で作用し、その対象の中で自分に関係するもの、したがってまた客観の中で自分に実在性を与えることによって真理を見い出すもの」(G W12. 199)のことである。ヘーゲルはこのような概念である客観的世界を「人格性」(G W12. 251)を有する絶対者とするが、あえて再言すればヘーゲルがこのような絶対者を神学的表象を以て定立しているのではないことは、絶対的理念を唯一の対象・内容とする哲学の包括するものが「実在的な有限性と観念的な有限性との諸形態、ならびに無限性と神聖性との諸形態」(G W12. 236)とされ、そこには超越者に帰せられるような人格性が含意されているのではないことからも明らかである。したがってヘーゲルの言うところの真理が、否定を介して把え返された具体的全体としての世界であることが最終的に確認できるのである。

ここにヘーゲルの真理観の固有性を対自化することができる。それは認識論と存在論の相互媒介性において把え返された世界の総体性が真理とされていることである。すなわちヘーゲルが論理学の課題としたことは、「絶対的理念の自己運動をただ根源的な言葉として叙述する」(G W ことであるが、そこには二つの前提が設けられている。その一つは、既に言及したことであるが、ヘーゲルが真理＝絶対者を予め完成したものとして前提するのではないことである。「真理そのものは過程の展開の中と終局の中とにのみ存在する」(G W12. 252)。したがって真理は絶対的理念の自己運動の結果としてはじめて顕現する。もう一つの前提は、この絶対的理念の自己運動が存在論的に独立的に存立するのではないということである。すなわちヘーゲルは言う。「絶対者はただ認識の媒介によってのみ把捉される」(G W12. 252)。つまり絶対的理念の自己運動とは、認識に媒介されてはじめて可能となる世界の生成なのである。したがってヘーゲルの言う真理とは認識と存在とが相即しつつ述語的規定性の関係的総体性として把え返された世界にほかならない。この意味においてヘーゲルが哲学的真理とした内容のそれ自身との一致とは、ある

事物に対して諸々の事物の区別された規定の本質的統一、すなわち述語的規定性の関係的総体性の中でその位置が指示されることと解される。[16] だが再確認すべきは、ある事物にその位置が指示されることとは、既成の座席の一つを指定されるが如き事態を意味するのではないということである。すなわちヘーゲルは言う。「規定や内容は（略）一つの区別をすることであり、〔区別によって定立された〕差異あるものを相互に関係づけることである」（GW11. 33）。つまりある内容とそれ自身との一致とは、「あらゆる事物は推理である」（GW 12. 95）という命題が端的に表明しているように、ある事物が否定を介しつつあらゆる他者との関係の総体性を己れのうちに包括することによって己れの規定を与えられることなのである。ここにヘーゲルが、関係的存在は「でない」という否定的要素によってしか規定できないとする現代哲学の一つの基本的知見を[17]自己の真理観の基底に据えていることを看取しうるのであり、そこにもまた彼の論理学の特質の所在を指摘できるのである。

むすび

ヘーゲルを近代哲学と現代哲学との媒介項とする見解は旧来からある支配的なものである。だがそれに対して彼の生涯が属さざるをえなかった歴史的時期を以て彼の哲学そのものを処断することを短見とする見解が異立しうる。本論はこうした相岐れる見解のいずれかを前提的に選取するのではなく、あくまでもヘーゲル自身に内在するかたちで彼の論理学に即してその特質を対自化することを試みた。基本原理としての否定の原理に着目することを通じて本論がヘーゲル論理学の特質として挙示しえたものは反省理論であり、その存在論的原理としての関係主義的存在了解である。本論では更にこのような特質の有する射程が旧来の哲学との対質の場において同一性概念と真理概念にまで及んでいることをも配視したが、ヘーゲル論理学のこれらの特質が有する現代的意義については論及しえなかった。それ故本論はヘーゲルの学史的意義を確定するための前梯たらざるをえなかったが、しかし本論が自己に措定した課題そのものは以上を以て不充全ながら一応果たしえたことになる。

註

括弧内の略符号はそれぞれ次の使用テクストを表示し、後続する数字はそのページ数を示している。但しEnzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830) のみは、先に書名の略符号（E）と節（§）の数を掲げ、その後に使用テクストとそのページ数を付した。

GW 11=G. W. F. Hegel, Gesammelte Werke, Bd. 11. Wissenschaft der Logik, Erster Band: Die objektive Logik (1812/1813), Hrsg. von F. Hogemann und W. Jaeschke, Hamburg 1978.

GW12=G. W. F. Hegel, Gesammelte Werke, Bd. 12. Wissenschaft der Logik, Zweiter Band: Die subjektive Logik (1816), Hrsg. von F. Hogemann und W. Jaeschke, Hamburg 1981.

L1=G. W. F. Hegel, Wissenschaft der Logik, Erster Teil (1831), Hrsg von G. Lasson, Hamburg 1963.

W8=G. W. F. Hegel, Werke in zwanzig Bänden, Bd. 8. Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830), Erster Teil: Die Wissenschaft der Logik mit den mündlichen Zusätzen, Hrsg. von E. Moldenhauer und K. M. Michel, Frankfurt am Main 1970.

(1) ヘーゲル論理学の根本原理として「否定」を主題化したことは、D・ヘンリッヒの功績に帰せられるであろう。Vgl. D. Henrich, Hegels Grundoperation. in: Der Idealismus und seine Gegenwart, Hrsg. von U. Guzzoni, B. Rang und L. Siep, Hamburg 1976, SS. 208—230. 但しヘンリッヒの問題点については、注(11)において触れる。また論理学を主題とするのではないが、一般的にヘーゲルの否定論の意義を説いているものとして、W. Bonsiepen, Der Begriff der Negativiät in den Jenaer Schriften Hegels (=Hegel-Studien/Beiheft 16), Bonn 1977, SS. 11-19. を挙げうる。しかし、本論がヘーゲルの否定原理に着目した未来の所以は、中埜　肇教授『ヘーゲル研究』(一九六五年)九頁における示唆にある。

(2) Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften (1817). in: Hegel, Sämtliche Werke, Bd. 6., Hrsg. von H. Glockner, Stuttgart 1927, S. 48.

(3) この点に関しては Hegel, Phänomenologie des Geistes, Hrsg. von J. Hoffmeister, Hamburg 1952, 63ff. の議論を前提としている。尚『精神現象学』(一八〇七年)におけるヘーゲルの認識に関する基本了解については拙論「哲学的問題構制の転換」(『理想』一九八三年十月『『精神現象学』研究」特集号)を参照されたい。

(4) 周知のようにアドルノは、「万法としての弁証法の核心は限定された否定である」と述べている。Vgl. T. W. Adorno, Gesammelte Schriften, Bd. 5., Frankfurt am Main 1971, S. 318.

(5) Vgl. I. Kant, Kritik der reinen Vernunft, Hrsg. von R. Schmidt, Hamburg 1971, S. 553 f. 〔A 574 f., B 602 f.〕

(6) Kant, ibid., S. 555. 〔A575, B603〕

(7) カントの実在性と否定との関係の把握、およびそれに対するヘーゲルの批判に関しては、vgl. L. Eley, Hegels Wissenschaft der Logik, München 1976, S. 67f. ただしエレイはテクストに第二版を用いているためか、ヘーゲルの否定の規定の意義を充分把握できず、そのためこの点においては本論をまともに展開していない。尚トイニッセンも実在性と否定を同格とする理解のレベルを超えていない。Vgl. M. Theunissen, Sein und Schein, Frank-

furt am Main 1978, S. 223 ff.

(8) ヘーゲル自身の建て前をそのまま受け止めれば反省理論は本質論にのみ妥当し、また否定の様態もそれぞれの領域で異なることになる。こうした理解に関して vgl. H. Rademaker, Hegels〈Wissenschaft der Logik〉, Wiesbaden 1979, S. 87.

(9) 関係主義という術語およびその内容の理解に関しては廣松　渉教授『存在と意味』(一九八二年)、特に四七九ページに負う。

(10) 言うまでもなくこの定式化はヘーゲルが『フィヒテとシェリングの哲学体系の差異』(一八〇一年) の公刊を以てイェナにおいて哲学者としてデビューした時、既にシェリングに対する独自的立場の確立の徴表として確定していた。Vgl. Hegel, Werke in zwanzig Bänden, Bd. 2, S. 96. 尚イェナ最初期におけるヘーゲルのシェリングとの関係については、拙論「ヘーゲル弁証法の社会哲学的基質」(一九八二年)参照。

(11) D・ヘンリッヒのヘーゲル理解の根本的問題は絶対的否定を一者―他者の相互反省ととらえるのではなく、単なる一者の自己関係ととらえることによって、ヘーゲルを実体主義的存在了解の枠内に釘付けすることである。Vgl. D. Henrich, Formen der Negation in Hegels Logik. in: Seminar: Dialektik in der Philosophie Hegels, Hrsg. von R.-P. Horstmann, Frankfurt am Main 1978, 225f. この点に関してはトイニッセンは正確な理解を示しているように思える。Vgl. M. Theunissen, op. cit., S. 49.

(12) Kant, op. cit., S. 417. [A387]

(12) この問題に関しては以下の箇所を参照されたい。M. Heidegger, Sein und Zeit, 11. Aufl., Tübingen 1967, S. 149. 廣松前掲書三〇ページ。

(13) ヘーゲルをこの文脈においてのみ解しているのが、W. Albrecht, Hegels Gottesbeweis. Eine Studie zur "Wissenschaft der Logik", Berlin 1958, S. 23. である。以下試みるのは、このようなヘーゲル解釈の問題性の対自化でもある。

(14) Hegel, Phänomenologie des Geistes, S. 21.

(15) バイアーヴァルテスは、概念と実在との一致というヘーゲルの真理概念のうちに伝統的真理概念の「変容」、すなわち「物」と「知性」との相互からの合致という把握しか見出せていない。Vgl. W. Beierwaltes, Identität und Differenz, Frankfurt am Main 1980, S. 251. これに対してトイニッセンは、「一致」を「合致」ではなく、「包合 Übergreifen」と解釈し、これを以てヘーゲルは伝統的形而上学の真理概念を超出したとする。Vgl. Theunissen, Begriff und Realität. Hegels Aufhebung des metaphysischen Wahrheitsbegriffs. in: Seminar: Dialektik in der Philosophie Hegels, S. 354. 前者は言うに及ばず、後者においてもヘーゲルの存在了解の把え返しがなされていないことによってヘーゲルの真理概念の内実は解明されていない。

(16) 丸山圭三郎『ソシュールを読む』(一九八三年)七一ページ参照。ただしヘーゲルにおいては否定が同時に肯定であることにより、その否定はソシュールのものとは区別されることは言うまでもない。翻ってソシュールにおいてはたとえ否定が強調されるにせよ、それによって規定されると言われる差異的なものは、実は規定される以前に既に自存性を与えられているとみなされざるをえない。

Während die traditionelle Theorie von Wahrheit die Gültigkeit des selbständig Bestehendes unüberlegt voraussetzt, hält Hegel Wahrheit für es, ein Moment des Ganzes zu sein. An die Stelle des Identiäts-oder Widerspruchsprinzip in der traditionellen Logik tritt zugleich bei Hegel die Formel von Identität der Identität und Nichtidentität als der Wahrheitskanon ein.

Daraus kann folgender Schluß gezogen werden, daß Hegels Logik ihre Eigentümlichkeit hat, aufgrund der Prinzip der Negation zum Kern habenden Theorie von Reflexion oder dem Seinsverständnis von Relationismus eine Wahrheitsbegriff zu konstruieren.

Das Prinzip ›Negation‹ in Hegels Logik

Kiichirō TAKEMURU

Die Aufgabe dieser Arbeit ist festzustellen, welche Eigentümlichkeit Hegels Logik im Hinblick auf seine Wahrheitstheorie hat.

Es ist kaum nötig zu sagen, daß das Problem der Wahrheit eine zentrale Rolle in philosophischen Diskussionen spielt. Nach der klassischen Definition ist Wahrheit ‚adaequatio rei et intellectus'. Dagegen nennt Hegel dieselbe die Übereinstimmung eines Inhalts mit sich selbst oder das reine Entsprechen des Begriffs und seiner Realitat. Dieser Wahrheitsbegriff Hegels stützt sich auf seine Einsicht in den Fehler, den die vorangehende Philosophien, besonders die neuzeitliche machten, daß der Gegenstand sich insofern von Natur nicht begreifen läßt, als man das Subjekt-Objekt Schema zur Voraussetzung für Erkenntnis hat. Hieraus kritisiert Hegel die Leistungen des Verstandes, deren das Subjekt-Objekt Schema zugrunde liegt, so daß er auf den Mangel des Verstandes, das Konkrete zu negieren und in Stücke es zu schlagen, hinweist, obwohl er seine Verdienst, einem Abstrakten eine Bestimmung zu verleihen, schätzt.

Hegel rechnet also der Vernunft die Funktion zu, über die Endlichkeit des Verstandes hinausgehen. Da diese Erhebung über die Beschränktheit des Verstandes die Negation, die die Vernunft gegen seine Produkt setzt, heißt, bedeutet diese Negation bestimmte Negation, die zugleich als Positives das Konkrete wiederherstellt. Mit einem Wort nimmt Hegel dies von Vernunft wiederhergestellte Konkrete für Wahres.

Dennoch ist die eingehende Betrachtung über seine Behandlungsart von Negation erforderlich zum zulähinglichen Verständnis für Hegels Wahrheitsbegriff, weil er Negation für eine bloße Methode ansieht, ja sogar als das Prinzip der Philosophie als solcher hält. Nämlich denkt er die Negation der Negation oder die absolute Negation als die höhere Bestimmung denn die Realität, um die Negation für die abstrakte Grundlage aller philosophischen Ideen und des spekulativen Denken überhaupt zu erklären.

Es handelt sich hierbei um Hegels Theorie von Reflexion. Diese Theorie besagt, daß alles, was ist, keine Gültigkeit bei sich selbst hat, sondern seine Bestimmtheit erst in seiner Beziehung auf sein eigene Andere aufnimmt. Also ist Hegel der Meinung, daß jedes Ding das in sich selbst Negation Enthaltende, d. h. das Gegenteil seiner an ihm selbst und Einheit mit seinem Anderen ist. Diese Theorie beruht, vom Gesichtspunkt des Seinsverständnisses genommen, auf dem von Relationismus.

Gewiß hat Hegels Wahrheitsbegriff diese Art von Seinsverstädnis zur Basis. Er denkt, offen gesagt, die organische Totalität von aufeinander beziehenden Bestimmtheiten als Konkretes oder Wahres. Für Hegel liegt daher die Wahrheit des Einzelnes darin, daß es seine eigene Bestimmtheit in seiner Beziehung auf Alles anderes erhält.